

大賞

すきなことを一生けんめい

荒川区立尾久宮前小学校二年

後藤 央甫

やなぎ田先生、こんにちは。ぼくは、よくなにかをあつめています。この本はそれがぼくにいてると思つて、すこしうれしくなつて読みました。

「あたまにつまつた石ころが」という本は、石が大すきで、小さいころから石をあつめつづけた人のお話です。ぼくがもっている石もその中にありました。お話の中に、目の前の石があることがおもしろくて、ふしぎな気もちになりました。

心にのこつたことは、

「あいつは、ポケットにも頭の中にも石ころがつまつているのさ。」

と、まわりの人にばかにされても、やめずにつづけ、さいごは石のせんもんかになったことです。本当にすきなことをつづけていると、けっかにながるんだなと思いました。

でも、そうならないこともあるように思いました。この本の人は、はくぶつかんでたまたまかん長さんに話しかけられて、せんもんかになりました。もしかん長さんにあわなかったら、ただの石をあつめるおじさんだったと思います。ぼくはそれがふしぎでした。すきなことだけつづけていてもいいのか、分からなくなりました。

そのことをお父さんに話したら、

「いまやっていることが、しょう来どうなるかはだれにも分からないんだから、まずはすきなことを一生けんめいやりなさい。」

と言われました。ぼくもそうだなと思いました。
だからこれからも、じしんをもって大すきなものをあつめようと思います。

ぼくはこの本を読んで、すきなことを一生けんめいやってもいいんだなと思いました。人からはいみがないと言われるかもしれませんが、それはだれにも分からないことです。だから友だちが一生けんめいやっていることも、ぜったいにじやまをしてはいけないと思いました。